

○オープニング

青空。真っ白な鳥が羽ばたいていく。

東雲（M）「俺にとって、歌は自分のアピールでしかなかった」

○ライブハウスKAGUYA・表

入口の上演案内看板には「エールの名前。

○同・バーカウンター

ライブ開演を待つ女性ファンたちでにぎわっている。彼女たちは一様に黒いリボンを身に着けている。

スタッフ（B）が慌ただしくバーカウンターにいるマスター（C）の元へ駆け寄ってくる。

スタッフ「マスター、ステインガー一つもらえますか」

マスター「なんだ仕事じゃないのか」
スタッフ「いえ、その俺のじゃなくて」

マスター「（察した）ああわかった。皆まで
言うな」

マスター、大きさにため息をついてボ
トルを手に取る。ボトルには『東雲隆
哉』のラベル。

材料を混ぜ、見事な手つきでシェイク
していく。

マスター「（カクテルグラスを置いて）ほい、
持ってけ」

スタッフ「助かります」

グラスを取り裏へと駆けていくスタッ
フ。

マスター、それを見送って棚の上の時
計を見やる。20時50分。

マスター「こりや10分押しだな」

○同・「エール」控室前

スタッフが小走りにやってきて軽くノ
ック。

スタッフ「持ってきました」

言うが早い扉を開けて入っていく。

○同・「エール」控室

バンドメンバー達が各々ライブに向けて準備に余念がない。

秦良悟（22）はギター、高遠優（25）

はベースのチューニング。木村歩（21）は鏡とにらめっこしつつアイメイクに熱心。

東雲隆哉（22）はソファにどっかりと座りカクテルを飲んでいる。傍らには所在無げなスタッフ。

スタッフ「タカヤさん、スタンバイしてもらえませんか、もう…」

東雲「もう過ぎてんだから、5分も10分も変わりやしねーよ。グダグダ騒ぐな酒がマズくなる」

スタッフ「そんなあ」

木村「（メイクしながら）おにーさん、新人さん？」

スタッフ「あ、はい。先週入ったばかりで」

木村「あのねえウチらいつもこんな感じだから。時間通りに始めたこと無いのよ。お客さんもわかってんの、そこんどこ。だからそんな焦んなくてもいいよ」

スタッフ「（不安げ）はあ…」

秦「上から怒られるのも原因作ってるタカヤだけだから。安心してていいよ」

東雲「おい」

不機嫌そうな東雲の声にも動じる様子もなく微笑む秦。ギターを担いで立ち上がる。

秦「じゃ、お先行くわ。トイレ行ってから来いよ」

秦、高遠と木村を促して控室を出ていく。

東雲、グラスを煽る。スタッフにグラスを押し付けると立ち上がる。

スタッフ「案内します」

東雲「（遮て）いらねえよ」

部屋を出て右へ行くようにする東雲。

スタッフ「あ、ステージは左……」

東雲「便所行ってから！」

○同・スタジオ

「エール」が演奏している。

鋭い視線と激しいフリで情熱的に歌う

東雲。

目にも留まらない動きでギターを弾く
秦。

クールにしかし大胆にベースを奏でる
高遠。

華奢な体と華やかな笑顔で激しいリズムを打つ木村。

多くの女性ファンがライブに熱狂している。

東雲（M）「どうだ、俺はこれだけ歌えるんだぞ。俺にはこれだけのファンがいるんだぞ。すごいだろ。それだけ」

曲が終わる。観客の黄色い歓声。

東雲 「サンキュー！」

東雲、大粒の汗を流しながら満足げな笑みを浮かべて。

東雲（M） 「俺の歌は、俺だけのもの」

○タイトル

○某市立病院・全景

近代的な大きな建物。診療科の数も多々あり、どこも患者が大勢いる。

看護師 「田中さーん、田中啓二さん、どうぞ」

受付 「こちらの処方箋を薬局に持って行って

いただいております……」

○同・内科待合室

東雲と木村が待っている。

興味なさそうに携帯をいじっている東雲。

青い顔で下を向いている木村。

何も話さない二人。

後ろを医療スタッフたちが何人か通り過ぎていく。

東雲 「（大きな欠伸）…これどんだけ待つの」
看護師 「次の方、どうぞ」

東雲 「お前じゃねえの？」

木村、青い顔で首を振る。

木村 「ううん…まだ僕じゃない」

東雲 「つつても…もう結構待ってね？」

木村 「……………」

東雲、携帯をしまつて立ち上がる。

東雲 「俺、外行くわ」

木村 「え、ちよっと待ってよ」

木村、東雲の腕を掴んで引き止める。

振り払おうとするが強い力。

東雲 「放せよ、アユム」

木村 「一緒に待っててよ、先生の話を聞いて」

東雲 「なんで俺が。ガキじゃあるまいし…放
せてば」

木村 「生きるか死ぬかの瀬戸際なんだから
いじゃん付き合ってくれても！」

東雲、腕を振り払い木村に向きあう。

木村は涙目。

東雲「そんなに悪いのか」

看護師（声）「次の方：木村さん、木村歩

さん、どうぞ」

木村「あ、はい。ほらタカヤ」

東雲「お、おい」

木村、東雲の腕を引き診察室に向かう。

診察室の扉の前で深呼吸。

木村「：よし」

木村、扉を開き入っていく。

○同・院内カフェ

静かなBGMが流れる店内で東雲と木

村が向かい合って座っている。

東雲、足を組みコーヒーをすすする。

木村、小さくなっている。

東雲「（カップを置いて）：で？病名はなん

だっけ」

木村「：便秘、です」

東雲「どーこが、生きるか死ぬかの瀬戸際だよアホくさ」

木村「だってあんなに腹だけ出ちゃってさあもう：腹水ってやつかと思っただもん」

東雲「しばらく出してなかつたとか気付かんのか」

木村「言われてみれば一週間くらいしてなかつたなー：って感じで」

木村、ごまかすように空笑い。

東雲、呆れたように溜息をついてポケットからミントのど飴を取り出して食べる。

東雲「一瞬でも心配した俺がバカだった。時間無駄」

木村「ごめんで。(手を合わせ)このとーり！ね？今度埋め合わせするから」

東雲「とりあえず、ここオゴリな」

木村「了解」

東雲「あと、これ。二袋買ってこい」

木村「タカヤ、いつつもコレだね？僕のオス

スメののど飴あげようか」

東雲「これ以外許さねーかな」

木村「はいはい、わかりましたよー」

木村、ふとテーブル上の携帯を見て

木村「あ、ヤバネイルの時間だ。行くね」

鞆と伝票を取って立ち上がる。

東雲「余命宣告聞いた後にネイル行くつもり
だったんか」

木村「（しなを作って）意地悪言っちゃいや
ん」

東雲「きもい」

木村「（笑って）じゃあね、またスタジオで
走り去っていく木村。

東雲「…ったく…」

東雲、ぼんやり窓の外を見つつコーヒ
ーを一口。のど飴をなめていたことに
気付いて顔をしかめる。

東雲「…ミントコーヒー」

携帯に視線を移して。

東雲「まだこんな時間か」

○同・会計待合室

微かにリラクゼーションミュージックが流れている、落ち着いた室内。

東みのり（15）がソファに座っている。会計窓口では母親のれいこ（お）が会計中。

片方の耳にイヤホンを着けて何かを聴いているみのり。手にした白杖で軽くリズムを取ってノリノリ。

れいこ「みのりお待たせ：楽しそうね？何聴いてるの？」

みのり「さーこがオススメしてくれたバンドの曲なの。すごいカッコイイんだ。聴く？」

みのり、もう片方のイヤホンをれいこに差し出す。

れいこ、耳を寄せて曲を聴く。

れいこ「あら、ロック」

みのり「イケてるでしょ」

れいこ「小夜子ちゃんにしてはちよつと意外

な感じね」

みのり「歌詞がいいの。乙女心わかってるって
いうか」

れいこ「乙女心ねえ」

みのり「さーこがね、来週ライブに行くんだ
って。連れてってもらおう約束しちゃった」

れいこ「ライブって：夜でしょう？あなたそ
んな暗い中外出られないじゃない」

みのり「~~正~~時からの回だって言ってたから大
丈夫。それに、さーこのお兄さんも一緒に
行ってくれるって。だからいいでしょ」

れいこ「（眉を吊り上げて）何言ってるの」
みのり「お願い」

れいこ「小夜子ちゃんだってそのライブ楽し
みにしてるんでしよう？あんたのお世話し
てたら楽しめるものも楽しめなくなっちゃ
うじゃない」

みのり「でも、さーこから行こうって」

れいこ「甘えすぎちゃいけません」

みのり「お母さん」

れいこ「もうその話はおしまい。ライブはダメよ」

みのり「ええー」

れいこ「さあ帰りましょう。ホラ、杖持って」

みのり「やだ！」

れいこ「みのり」

みのり「大丈夫だもん。私がこの目になって

もう結構経つんだよ？一人でも動けるもん。

ライブも行けるもん」

れいこ「いい加減にしなさい、わがまま言わないの」

みのり「やだ！お母さんのバカ！」

れいこ「みのり！ちよつとどこ行くの！」

みのり、れいこに背を向けて走り去っていく。

○同・中庭

日差しが暖かく、微かに鳥の声。風に木々が揺れている。

東雲が歩いてくる。

東雲 「病院の中にこんなキレイな中庭がある
なんてなあ……。いや、むしろ病院の中だか
らこそ、か？いい気分転換になりそうだも
んな」

東雲、歩きながら鼻歌。

東雲 「お、いいメロディきた……」

スマホを取り出し、鼻歌を録音。

東雲 「……よし。リョウゴに聴かせてやる……」

向こうからみのりが走ってくる。

何かに躓いたのか、盛大に転ぶ。

みのり 「きゃっ」

東雲 「わ……だ、大丈夫か!？」

東雲、みのりに駆け寄る。

東雲 「おい、あんた……」

東雲、彼女の元にある杖を見つけて一

瞬手が止まる。

みのり 「い、いたい……」

東雲 「（我に返って）大丈夫か、あんた？」

みのり 「う、はい……」

ゆっくりと起き上がるみのりに、杖を

拾って渡す東雲。

東雲「ほら、コレ。あんたのだろ」

みのり「あ、はいそうです。ありがとうございます
います」

みのり、杖を受け取る。

東雲「頭とか打ってないか」

みのり「あ、そこはちゃんとかばってるんで
平気です。私これでもプロなんで」

東雲「プロ？」

みのり、立ち上がって膝の土をはたき
ながら。

みのり「よいしょと：よくやっちゃうんで
すよねー昔からのクセっていうのかな、こ
の目でも走り回っちゃってよく転んじゃつ
てるんです。だから、転ぶのプロ級」

東雲「（吹き出す）あんた面白いこと言うな
あ、そういうの嫌いじゃないぜ」

みのり「（笑い返す）」

東雲「でもなんであんなに走ってたんだ？ 仮
にも病院だぜ？ ココ」

みのり「それが…」

一気に表情が曇るみのり。

東雲「うん？」

みのり「お母さんがひどいんです！」

みのりのマシンガントークが始まる。

そのまま庭から離れていく。

○ライブハウス K A G U Y A ・スタジオ

木村と高遠がそれぞれ練習している。

秦がスタジオに入ってくる。

秦「あれ、タカヤは？」

木村「まだ来てないよー」

秦「まだって…今日は5時始まりだって言っ

てたのに…。アユム、何も聞いてないのか？

今日病院一緒だったんだろ」

木村「僕先に出てきたからわかんないよ」

秦「スグルも、連絡来てないか」

高遠、首を横に振る。

秦「（盛大なため息）まったく、何やってん

だアイツは！」

木村「まあまあリョウゴ、そんなにカリカリしないですよ。いつものことじゃん」

秦「いつものことだから困ってただけだな」

あからさまにイライラしている秦。

一瞬の間。

気まずさに焦る木村。

木村「あ、それよりさ、スグルが新曲書いてきたって！ね、スグル？」

高遠「え、でもまだあれは……」

木村「いいから！見せて見せて」

高遠「ああ……」

木村に急かされて、高遠は渋々パソコンをいじって音楽を流す。

高遠「……まだサビメロしかないけど」

秦「へえ……さすがスグル、いいメロディだ」

木村「でしょ？タカヤが来るまでさ、せっかくだからコッチ進めようよ」

秦「……来週のライブに向けて練習したかったが……仕方ないな」

秦、ソファに座るとギターでメロディ

を奏で始める。

高遠、そっと木村を見て親指を立てる。

高遠 「：アユム、グツジョブ」

ウインクと共に親指を立てる木村。

○某市立病院・中庭

中庭のベンチに座っている東雲と木村。

東雲はホットコーヒー、みのはホット

トココアを持っている。

話し終えたみのは若干満足そうにコ

コアをすすっている。

東雲 「なるほどなあ」

みのは「ひどいでしょ？本人が大丈夫って言

ってんのに」

東雲 「ま、頭ごなしに否定されたら腹立つの

は仕方ねえわな」

みのは「そーなの。さーこもさーこのお兄ち

ゃんも一緒にいてくれるから絶対安全だっ

て言ってるのにダメ！って…」

東雲 「そんだけ、娘のことが心配だってこと

じゃねえの？

大丈夫って言ったって、お前さつき盛大にこけてたじゃん」

みのり「う…」

東雲「ライブハウスつつたら、だいぶ客でごった返すし、杖持って移動ってのは結構大変だと思うぜ」

みのり「そんなに狭いの？」

東雲「場所にもよるけどな」

みのり「…そうなんだ」

東雲「母ちゃんてのは、こどものことが心配で仕方ねえもんだ。ましてや、あんたみたいな目で、しかも女の子だろ。心配するな。ってのが無理な話だ」

みのり「…それはわかるけど、でも私もライブで、生で聴きたいんだもん…」

東雲「そんなに気に入ったのか」

みのり「うん！インディーズなんだけど、すごく素敵なの。初めて聴いてすぐ気に入っちゃった」

東雲 「へえ」

みのり 「あなた、ライブハウスとか詳しいんだっいたら知ってる？ 『エール』 ってバンド
なんだけど」

東雲 「！」

突然むせて咳き込む東雲。

みのり 「え、ちよつとどうしたの大丈夫？」

東雲 「わ、悪い悪い：大丈夫」

みのり 「もービックリさせないでよね。それで、知ってる？ 『エール』」

東雲 「知ってるっていうか：」

遠くでれいこがみのりを探している。

れいこ（声） 「みのりー！みのり、どこにいるのー？」

みのり 「お母さんだ」

東雲 「戻れよ。心配してるぞ」

みのり 「：うん：」

みのり、まだ少しためらっている。

東雲 「ちよつと待て」

東雲、鞆から出した手帳に何かを書き

つけるとそこを千切りみよりの手に握らせる。

東雲「これ、やる」

みよりの「何？これ。ゴミ？帰りに捨てて置いてってこと？」

東雲「違う。そこに書いた日時に、お友達と来な。俺の生バンド聴かせてやる」

みよりの「あなたもバンドマンだったんだ」

東雲「まあな。東雲隆哉ってんだ。その受付で名前言ってくれたらいいから。とりあえずそれで我慢しな」

みよりの「いいの？ありがとう！」

れいこ（声）「みよりのー！」

東雲「ほら、探してる」

みよりの「うん。（大声で）お母さーん！こっち、中庭！！（東雲に）私、東みよりの」

東雲「ああ。よろしくな、みよりの。…おっと、俺もいい加減練習行かないと。じゃ、また今度」

みよりの「うん、ありがとう！」

東雲、足早に去っていく。

入れ違いにれいこがみのりの傍へ走ってくる。

れいこ「みのり！探したわよ…」

みのり「お母さん、ごめんなさい。私、わがままだった」

れいこ「あら…急に聞き分けがいいのね」

みのり「頭が冷えたのよ。帰ろう？お母さん」
れいこ「そうね…荷物持つわ」

みのりとれいこ、ゆつくりと歩き出す。

○ライブハウス KAGUYA・スタジオ（数

日後）

入口の上演案内は「無し」だがスタジオ内では「エール」が演奏している。

ボーカル・東雲の伸びやかな声。

みのりと五十嵐小夜子（15）が見学している。

みのり「…小夜子…」

小夜子「…うん…？」

みのり「信じられる？ 私たち、あの「エール」の演奏を：すっごく近くで聴いてるのよ」

小夜子「夢じゃないかって思ってる：」

みのり「だよねだよね：。あの時のお兄さんがタカヤさんだとか、そんな偶然であるのね：」

小夜子「うんうん」

みのり「ねえさーこ、ホントに、今私たちの前で演奏してるのは「エール」なの？ ジャケットと同じ人歌ってる？」

小夜子「歌ってるよ：間違はなくホンモノよ」

みのり「ホンモノかあ：（感動）」

演奏が終わる。

みのりと小夜子、精いっぱいの手を送る。

東雲「サンキュー」

みのり「すてきすてき！ ホントにすてきだった！」

小夜子「感動しました！」

秦「そう言ってもらえたなら、やった甲斐が

あったね」

木村「最初に話聞いたときはびっくりしちや
ったけどね」

木村の言葉に高遠も頷いている。

東雲「うるせ」

小夜子「すみません、やっぱりご迷惑でした
よね。ライブ以外の時に部外者が入っちゃ
って」

秦「ああいや、そういうわけじゃないんだ。

ただ、タカヤが急に言い出したから驚いた
ってだけ」

みのり「そうなんですか？」

秦「ま、わがまま言って俺たちを振り回して
るのはいつものことなんだけどねえ」

東雲「おい」

みのり「えーでも、この間はすつごく優しく
かったですよ。初めて会ったのに相談乗って
くれて」

木村「へえ…」

珍しそうに東雲を見る木村。

東雲 「も：もういいじゃねえかそんな話！

オラお前ら、もう暗くなるから帰れ！途中
まで送ってやっから！」

木村 「やつさしーい、タカヤ」

みのり 「えーまだ皆さんとお話しを：」

東雲 「また時間取ってやっから！」

秦 「やーさしー」

東雲 「うっせーぞお前ら！（みのりたちに）
行くぞ！」

みのり 「はーい」

小夜子 「あ、それじゃあありがとうございます
しました！」

秦 「気を付けて帰ってね」

木村 「まったねー」

高遠 「じゃあな」

東雲、みのり、小夜子がスタジオから
出ていく。

木村 「意外だなー、タカヤがフアンの子をス
タジオに呼ぶだなんて」

秦 「そうか？」

木村 「だってタカヤだよ？ いったもすごい俺
様じゃん」

秦 「アユムはまだまだ人間観察甘いなあ」

木村 「えーそうかなあ」

○ 同・玄関前

扉が開いてみゆりと小夜子が出てくる。
ちゃんと二人が出るまで東雲はドアを
抑えている。

小夜子 「ここで大丈夫ですよ」

東雲 「迎えでも来るのか」

小夜子 「はい、兄が」

東雲 「そうか。じゃあ安心だな」

みゆり 「タカヤさん、また来てもいいですか」

東雲 「ああ、かまわねえけど…」

みゆり 「やった！ あ、じゃあ連絡先を」

鞆を探るみゆり。

東雲 「あんた携帯持ってるのか」

意外そうな東雲に、自慢げに携帯を突
き付けるみゆり。年頃の女の子らしい、

デコレートされたスマホケース。

みのり「ふっふっふー、バカにしないでください、イマドキのスマホは色々機能がある
おかげで私でもちゃんと思えるんですか
ら！」

小夜子「よく私とも長電話してるしねえみのり？」

みのり「ねー！」

東雲「そんなら別にかまわねえよ」

みのり「やったやった！電話しちゃいますねー」

「タカヤさん！」

東雲「長電話は勘弁だぜ」

みのり「一時間はオツケーですよね」

東雲「じゅうぶん長いわ！」

みのり、笑う。つられて二人も笑う。

東雲も携帯を出して連絡先を交換。

東雲（M）「それから俺とみのりは、時々連絡を取り合った。内容は他愛のないことがほとんど。学校の友達がどうか、成績が

どうか。俺の方もバンドの連中の世間話とか、色々話した」

○東雲の自宅（深夜）

ワンルームマンションの一室。

あまり生活感のない、殺風景な広い部屋の中で、あちこちに散らばっているバンド関係の雑誌が目につく。

テーブルの上にはノートPCとミントのど飴と冷たい麦茶。ノートPCからは高遠が作っていた新曲のデモが流れている。

ソファに寝転び、ノートに歌詞を書きつけながら東雲が電話をしている。

みのり（電話）「タカヤさんですごく優しいですよね」

東雲「俺が？そんなこと言われたの初めてだ」
みのり（電話）「私、こんな目でしょ？表情

が見えない分声色で色々感じてるんです。

タカヤさんの声、すごく優しい人の声です。

大好きな声です」

東雲「俺の声が…」

みのり（電話）「結構当たるんですよ？ 凶星
でしょ？」

東雲「いや、全然」

みのり（電話）「まったまたあ照れちゃって」

東雲「お前って恥ずかしいこと平気で言う奴
だな」

みのり（電話）「どやっ」

東雲、笑う。途中、喉に何か引っ掛か
るのか咳ばらいをする。

東雲「悪い、ちよつと喉が」

茶を飲んで喉を潤す。

みのり（電話）「ところでえ…」

東雲「うん？」

みのり（電話）「そろそろ、新曲の季節だっ
たりしません？」

東雲「なんだお前…俺の家に監視カメラでも
付けてんのか」

みのり（電話）「え、凶星！？」

東雲 「ああ。こないだスグルが曲持ってきてくれてな。俺の方もいい感じの歌詞が書けたから合わせようかって辺りだ」

みのり（電話） 「わー楽しみ！ねえねえ、今度は私を歌詞に入れてほしいなあ」

東雲 「もっと大人になって、いい女になったらモデルにできるかもな」

みのり（電話） 「えー、今もかわいいと思うんだけどな」

東雲（M） 「妹がいたら、こんな感じなんだろうか。みのりの屈託のない笑顔と元気のいい笑い声が、俺は好きだった。みのりからの電話が、俺の楽しみになっていた」

○ライブハウス K A G U Y A ・スタジオ

「エール」が練習している。

ドアが開いてマスターが入ってくる。

マスター 「お、やっとなるな」

秦 「マスター」

マスター 「どうよ、調子は…って、センター

ががら空きなのはこういうこった」

木村「いつものアレですよ、マスター」

マスター「なんだタカヤの奴、まだ来てないのか。相変わらずだな」

秦「今日は遅刻記録更新だからね、来たらみっちり説教と練習だな」

木村「うわー、こわ」

マスター「ま、遅刻する方が悪いからな。タカヤには甘んじて受けてもらおうしかないな」

コンコンとノックの音が響いて、東雲がゆっくりと顔を出す。

秦「タカヤ」

マスター「お、やっと来たのか遅刻魔」

木村「タカヤおはよー遅いぞ」

東雲「（かすれた声で）おっす…」

秦「タカヤ？どうしたその声？」

マスター「随分ハスキーじゃないか」

東雲「（咳き込みながら）ちよつと風邪気味みてえ」

木村「お腹出して寝てたんでしょータカヤは

だらしないから」

東雲「アユムほどじゃない」

木村「なんだとお」

秦「タカヤ、そんな声であんまりしゃべるな。

アユムもからかうなよ」

東雲、練習の準備を始める。ミントのど飴を取り出して口に放り込む。

東雲「とりあえず、コレでもなめてるから大丈夫だろ」

マスター「あんまり無理すんじゃないぞ、ボーカーリスト」

東雲「わかってるよ」

秦「じゃあ今日は音出しはそこそこで切り上げて新曲の仕上げやっていくようにしようか。タカヤ、詞はできてるんだろ」

東雲「だいたい」

ノートを秦に渡す。汚い字で殴り書きされた歌詞。一見、何と書いてあるかもよくわからない。

秦の後ろから、木村が覗き込む。

木村 「相変わらずすつごい字だねえ…」

秦 「うん、いい感じだなタカヤ」

木村 「そしてちゃんと読めるリョウゴさんす

ごいわ」

秦 「マスター。文字起こし頼んでいいか」

マスター、秦からノートを受け取ると

テーブルに座る。

マスター 「まかせろ」

木村 「え、マスターも読めるの」

マスター 「俺もまあ付き合い長いからな。さ、

お前らは練習してな」

秦 「サンキュ。じゃあ、やろうか」

メンバー一同、配置に就く。

東雲 「スグル：俺の字ってそんなに汚ねえ？」

高遠、遠慮がちにうなづく。

東雲 「マジか」

木村 「行くよー」

木村がステイックで音頭を取り練習開始。

東雲、軽く咳払いしつつ歌う。高音も

少し苦しそうだがなんとか歌っている。
秦、そんな東雲を心配そうに時折見ている。

マスターはノートに書き込みながら聴いていたが、東雲の声に顔をしかめている。

頑張つて歌っているが、とうとう途中で声が掠れ出なくなる。

秦「大丈夫か、タカヤ」

東雲「（咳払い）大丈夫…」

水を飲むが喉はすっきりしない。

マスター「タカヤ、お前病院行ってこい。耳

鼻科」

東雲「ただの風邪だって」

マスター「お前さんみたいな症状、何人も見てんだよ。耳鼻科で診てもらえ。ほついたら悪化するぞ」

東雲「……………」

高遠「タカヤ、行ってこい」

東雲「お前まで。…わかったよ」

秦「そうだな。ちゃんと行って治してこいよ。

曲の方はこっちで進めとくから」

東雲「…わかった」

東雲、渋々荷物を片付けると部屋を出ていく。

秦「タカヤの奴、大丈夫かな」

マスター「まあ早めに治療しときや多分大丈夫だ」

秦「だといいけど…」

不安を拭えない秦。

○某市立病院・耳鼻科

一通りの検査を終えた後の診察室。

坂本医師（35）がカルテに診断内容等を書きつけている。

坂本「声帯にポリープできちやってますねえ」

東雲「ポリープですか」

坂本「ええ、こう…（指で丸を作ってみせて）結構大きいのが、ね。結構喉使ってるでし

よ」

東雲 「まあ：バンドやってるんで」

坂本 「あーそういえばそれっぽい恰好してますもんねえ。多いんですよ、ボーカリストさんとか声を出す職業の方にはね。声帯ポリープの原因で一番多いのって、声の出しすぎですからねえ」

東雲 「治るんですか」

坂本 「まずは安静に、喉を休ませてもらって。

まあ大体は手術でキレイに切っちゃいますね。簡単な手術ですし、ちゃんとケアすればその後も声は元通り出せるようになると思いますよ」

ホッとする東雲。

○東雲の自宅（深夜）

ソファにねそべり、音楽を聴きながらポットとしている東雲。

テーブルの上に広げているノートPCには「声帯ポリープ」の検索履歴。

自然と鼻歌が出そうになって止める。

東雲の携帯が鳴る。秦からのラインだ。

秦（LINE）「どうだった」

東雲（LINE）「声帯ポリープできてた。

しばらくくしゃべるなって」

秦（LINE）「そうか」

東雲（LINE）「薬で治らなかつたら手術らしい」

秦（LINE）「どちらにしろ、長いこと声が出せないってことか」

東雲（LINE）「悪い」

秦（LINE）「こっちは構わない。それより、みのりちゃんの方は大丈夫なのか。電話できないだろ」

思わず起き上がる東雲。

東雲（M）「なんで電話してること知ってるんだこいつは！」

秦（LINE）「心配するだろうし、こちらから説明しようか」

東雲（LINE）「一応メールもできるらしいから言っておくから、心配するな」

送るとすぐにメール画面を開いてみりへとメールを送る。

東雲「…だっせー…」

携帯を放り出しソファに沈む東雲。

PCに手を伸ばし音楽を止めようとしたところで携帯が鳴りだす。弾かれたように飛び起きて携帯を拾い上げる。

着信相手はみのり。

通話ボタンをタップして耳に当てた瞬間。

みのり（電話）「ポリープできたってどうい

うこと!?!」

みのりの大きい声。

○みのりの部屋（深夜）

ぬいぐるみが溢れている少女らしい部屋。棚には「エール」のCDが何枚か置いてある。

ベッドの上に座り、携帯で話すみのり。

白杖は枕元に立てかけてある。

東雲（電話）「みのり：」

みのり「あ、しゃべっちゃダメなんだよねゴメン、無理しないで。あーえっとそれじゃ上手く会話できないなあ：あ、じゃあこうしよ。イエスだったら電話を1回ノック、ノーなら2回ノックする。どう？」

○東雲の自宅（深夜）

みのりの言葉に驚きをかくせない東雲。

東雲（M）「結構頭回るじゃん：」

○みのりの部屋（深夜）

携帯から1回ノック音。

得意げなみのり。

みのり「いいアイディアでしょ。映画か何かであったんだよねーこういうの！これでちよっとはおしゃべりできるよね」

1回ノック音。

みのり「それで、声帯ポリープって何なの？声が出せないって、ずっと出せなくなっち

やうの？」

2回ノック音。

みのり「良かったあ。じゃあ、またタカヤさんの歌も聴けるのね」

ちよつと間があつて1回ノック音。

嬉しくなるみのり。

みのり「んゝ…でもやっぱり会つて話したいなあ…。またスタジオ行つてもいいですか？そしたらもつとお話聞けると思う」

1回ノック音。

みのり「きゃーやった！じゃあ、またさーことお邪魔させてくださいね、えつといつにしようかなあ…」

○東雲の自宅（深夜）

携帯から漏れ出るみのりの元気な声。

穏やかな表情でその声を聴きながら、

そつと検索履歴が映るPCを閉じる。

時々通話口をノックしつつ、会話は続く。

○ライブハウス K A G U Y A ・スタジオ

「エール」のメンバーが会議中。

テーブルの上には、秦作成の声帯ポリ
ープについて調べた簡単なレポートと
筆談用のホワイトボード。

そのレポートを眺めながら木村が髪を
クルクルと指に巻き付ける。

木村「なんか、テレビの中だけの話だと思っ
てた、こーゆーの」

秦「ボーカリストっていう点では芸能人とそ
れほど変わらないからな、タカヤも。知名
度がダンチなだけで」

木村「そう言われればそっか」

高遠「：リョウゴ、新曲はどうする」

木村「そういえば次のライブももう宣伝しち
やってるよね」

秦「新曲は発表の時期を遅らせるだけで問題
はないと思うけど、ライブだなあ」

木村「タカヤ、声出せるようになるまでどれ

くらいかかるの」

東雲（文字）「手術してから最低一週間は声出したら駄目らしい」

木村「うえ、手術すんの。結構大変なんだ」

東雲、暗い表情でうなづく。

木村「あーゴメン責めてんじゃないよ。ちょっとびっくりしただけ」

高遠「手術の予定は」

東雲（文字）「来月の予定」

秦「それじゃあやつぱり、次のライブには間に合わなそうだな……。たとえ間に合ったとしても、いきなりライブってのもどうかと
思うし」

木村「じゃあ中止？」

高遠「ちよっと現実的じゃない」

東雲（文字）「もうチケット売ってるから無理だろ」

木村「でもボーカルいないんじゃない？」

秦「俺がやろう」

東雲、驚いて秦を見る。

東雲（文字）「大丈夫なのか？」

秦「普段コーラスやってるんだ、タカヤの穴を埋めるくらいならなんとかなると思う。」

最初に事情を話せば皆もわかってくれるさ」

木村「リョウゴができるっていうんならいいけど：今から全部覚えるのきつくはない？」

秦「為せば成る」

木村「かっこいい」

秦「タカヤに安心して治療してもらうためだ、それくらいやってやるよ」

東雲（文字）「ありがとう」

秦「まかせとけ」

親指を立てて微笑む秦。東雲も笑い返す。

そこへノックの音。マスターが顔を出している。

マスター「来客だぞ」

みのりと小夜子が入ってくる。

みのり・小夜子「こんにちは」

木村「あれ、みのりちゃんに小夜子ちゃん」

みのり「えへへ、また来ちゃいました」

小夜子「今日もこちらで練習するってきいて、
みのりがどうしても行きたいっていうもの
で：すみません」

秦「いや、全然構わないよ。タカヤが心配だ
ったんだろ？」

みのり「はい。電話じゃやっぱり状況わから
なくて、気になっちゃって」

秦、東雲をみのりの前へ連れていく。

秦「声が出ない以外は、健康体みたいだから
それほど心配はいらないと思うよ、ホラ」

東雲の手を取り、みのりと繋がせる。

みのり「：ホントだ。タカヤさんの手、あつ
たかい」

ギュッと東雲の手を握るみのり。

東雲、照れて頭をかく。

秦「ちよつと安心した？」

みのり「はい」

秦「良かった。じゃあさ、今日はちよつと俺
の歌を聴いて行ってよ。今度のライブ、俺

が歌うから」

小夜子「リョウゴさんが？わあ、楽しみ」

秦「タカヤの代役、ちゃんと務まるか判断してもらおうかな。ね、タカヤ」

東雲、うなづく。そのまま二人をうながして椅子に座らせる。

互いの手を握ったまま、みりの隣に腰かける東雲。

みり「タカヤさん、声出るまでライブお休み？」

みりの手を一回ノックする東雲。

みり「そっか…」

ステージの準備ができた。

いつものようにギターを持った秦が、

今日はセンターに立つ。

秦「じゃあ試しにやってみるか。『エンドレス』行くぞ」

木村「オーケー」

木村がステイックでリズムを取る。

演奏が始まる。

みのり、小夜子と共に客席で見る東雲。
秦が歌い始める。

東雲とは違うが、伸びやかで美しい声。

東雲の目が見開かれる。

ギュツと手を握り締める東雲。

力が入ったその手に、みのりが心配そ
うにこちらを向いている。

小夜子は楽しそうに聴いている。

演奏終了。

小夜子は激しく拍手。

みのりも我に返り拍手を贈る。

秦「ありがとう、二人とも」

木村「結構いけるんじゃない？リョウゴ」

秦「そうか？安心した」

秦、ステージを降りて東雲の前に立つ。

秦「タカヤ、どうだった？お前の代役はでき

そうかな」

何か考え込んでいる様子の東雲。

秦「タカヤ？」

東雲「あっ…」

秦の存在に気付き、慌ててボードを手
に取る。

東雲（文字）「全然いける」

秦「良かった。とりあえずファンの皆をがっ
かりさせずに済みそうだな」

小夜子「すごく素敵でしたリョウゴさん！ま
すますファンになっちゃった」

秦「ははは、嬉しいな」

木村「ライブでファンもっと増えちゃうかも
ねーリョウゴ？」

秦「俺は二番手でいいよ」

不意に立ち上がる東雲。

みのり「タカヤさん…」

東雲「トイレ」

みのりの手を放し部屋を出ていこうと
する東雲。

みのり「（慌てて手を握り直し）わ、私も行
く」

小夜子「み、みのりタカヤさんお手洗いつて」

みのり「私もトイレ！案内してくださいタカ

ヤさん！」

小夜子「みのり、私行くよ」

みのり「いいの、タカヤさんと行くの！」

みのりに押し切られる形で部屋を出て
いく二人。

○同・女子トイレ前

みのりの手を引いてやってきた東雲。

中に入るように促すとその手を振り払
うみのり。

みのり「もう、ホントにトイレだと思ったん
ですか？違いますよっタカヤさんもそうで
しょ？」

東雲「……ばれてたのか」

みのり「あ、しゃべっちゃダメですってば。

あっちでお話ししましょ、クールダウンし
なきゃ」

東雲、苦笑い。

みのりも微笑み返す。

○ 同・ベンチ

みのりが座っている。

東雲がドリンクを両手に持って戻ってくる。

みのりの手にドリンクを持たせると隣に座る。

みのり「ありがとう」

それぞれがドリンクに口を付けて黙っている。

みのり「：タカヤさん」

東雲、みのりを見る。

みのり「さっきのリョウゴさん、素敵でしたね」

ドリンクを飲む東雲の手が止まる。

みのり「タカヤさんの歌声とも違う、優しい感じだ」

静かにドリンクを持った手を下ろす東雲。

みのり「でも、タカヤさんはタカヤさんですよ？タカヤさんの代理はできても、タカヤ

さんに取って代わることはできないですよ、絶対」

みのり、東雲の手をギュッと握る。

みのり「私、タカヤさんの歌が大好きです。

だから…不安にならないで」

東雲「……………！」

東雲、そっとみのりの頭をポンポンと叩く。

東雲「……………サンキュ」

みのり「元気、出してくれます？」

東雲「ああ」

みのりの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

みのり「きゃっ、ちよつと髪がグシャグシャ

になっちゃう！女子の髪は大事なんですよ
う！」

東雲、笑う。その微かに聞こえる声で、

みのりも微笑む。

みのりが雑談を始める。その姿をバツクに。

東雲（M）「何も言葉にしていけないのに、み

のりには全部バレていた。ガキみたいなきけない考えを読まれて恥ずかしいくらいだったけど：なぜだか、それが嬉しかった」

○某市立病院・全景

東雲（M）「だけど、あの時芽生えてしまった気持ちは、しばらく俺の中に暗い影を落としていたんだ」

○同・病室（夕方）

耳鼻咽喉科病室。

入口には東雲の名前。4人部屋だが他に入院患者はいない。

4人部屋の一番窓側が東雲のベッド。

枕元の台には卓上カレンダーがあり、

5月15日に「エール」のライブ日、

その二日前の5月13日に東雲の手術日が書かれている。

東雲はベッドに寝転び携帯を見ている。

日付は5月12日。

扉をノックする音がして顔を向けると
秦が顔を出している。

秦「よお。見舞いに来たぞ」

秦、手に持ったビニール袋を見せながら入ってくる。

東雲も起き上がり彼を迎え入れる。

ベッドサイドの椅子に腰かけ、袋から
チョコミントプリンを取り出す。

秦「これ、差し入れ。すごく美味いんだぜ。

お前ミント好きだろう？」

東雲、うなずいてプリンを受け取る。

秦「ちよっと調べただけだけどさ、入院自体は
そんなに長くないんだってな」

東雲、メモ用ボードを取り出し。

東雲（文字）「長くて一週間くらいらしい」

秦「そっか。で、退院したらすぐに元通りに
歌ったりできるのかな」

東雲（文字）「それはまだわからない」

秦「わからないか：いや、お前に無理を言
たいわけじゃないけど、やっぱり早めに戻

ってきてほしいなって思ってたね」

秦、鞆からUSBメモリと歌詞ノート
を取り出して東雲に渡す。

秦「それ、完成した曲。実はさ、この曲俺の
歌で発表しようってことになったんだ。ア
ユムが推してきてさ、せっかく出来上がっ
たんだから早くやりたいうるさくて。
それで来週やるライブで、正式にお披露目
しようって話に」

東雲「……………」

東雲、USBを握ってうつむいたまま
答えない。

秦「悪い、事後報告になっちゃって」

秦「でもさ、俺はやっぱりお前に歌ってほし
いと思ってる。この歌詞もお前の気持ち
を歌ってるやつだろ。お前が歌うのがふさわ
しい。だからさ…聴いておいてくれないか」

秦、東雲の手を握る。

秦「ウチのボーカルはお前ひとりだ。俺はた
だの代理でしかないからな。こんなことで

へこたれんなよ」

東雲、秦の顔をじっと見て、ニヤリと笑ってみせる。その強気な笑顔に秦は安堵の表情でその肩をポンポンと叩く。

秦「心配いらなかったかな、タカヤには」
立ち上がる秦。

秦「今日はそれ渡したくて来たんだ。手術は明日だろ？しっかり休んで体力養ってとけよ」

東雲「（プリンを指しつつジェスチャーで）
コレ食べて寝とくよ」

秦「そうしてくれ。それじゃあな。無事終わったら報告よろしく」

秦、部屋を出ていく。それを手を振って見送る東雲。

扉が閉まると、途端に表情が暗くなる東雲。

握ったままだったUSBを机に放り投げ、寝転がる。

USBは机から転げてそのまま床に落

ちるが、東雲は気に留めない。

携帯に着信。見ると「エール」の L I
N E グループに木村から。

木村 (L I N E) 「明日手術なんだって？頑
張れよ〜！」

高遠 「いい報告待ってる」

東雲、返信せず携帯も枕元に放る。そ
のまま目を閉じる。

テーブルの上にはチョコプリン。

○同・病室

テーブルの上にはチョコプリンの空き
容器が 2、3 個重なっている。

坂本医師が東雲を診察している。

坂本 「：うん、術後の経過は順調そうだね。

もう声を出してもいいよ。出せる？」

東雲、うなずいて声を出そうとするが
掠れて上手く出せない。

東雲 「あ：れ：」

坂本 「無理に出そうとしないで、ゆっくりで

いいよ。無理するとまた負担がかかっちゃうから。長いこと声出してなかったからね、ちよつとりハビリしながらの方がいいかもね」

東雲「はい」

坂本「うん、いい返事だね。もう明日には退院していいから、家族の方に迎えに来てもらってね」

立ち上がる坂本医師。テーブルの上の空き容器に目が留まる。

坂本「随分好きなんだね？コレ」

東雲「親友のオススメです」

坂本「へえ」

東雲「俺のオススメは、これです」

東雲、引き出しからミントのど飴を出して坂本医師に一粒渡す。

坂本「なるほど、君からやたらとミントの香りがすると思ったらそのせいか。ありがとう、もらっておくよ」

のど飴をなめる坂本医師。

坂本「それじゃあ、これで。：ああそうだ、君バンドやってるんだったよね？」

東雲「はい」

坂本「復帰したら、今度は僕にも聴かせてくれるかい」

東雲「ぜひ」

坂本「楽しみにしてるよ。それじゃ、お大事に」

部屋を出ていく坂本医師。その姿を見送ってから、携帯でLINEを送る東雲。

すぐに返事が来て、また東雲も返す。

○みのりの部屋（夜・数日後）

くつろいでいるみのり。

携帯から着信音が鳴る。

みのり「この音…！」

急いで携帯を手取る。

みのり「もしもし、タカヤさん！」

東雲（電話）「なんだ：すごい勢いだな」

みのり「だって！電話ってことは：声！タカヤさん、声治ったのね！」

○東雲の自宅（夜）

携帯から悲鳴にも近いみのりの歓声が聞こえる。

東雲、一瞬耳から離す。

東雲「落ち着け、耳が壊れる」

みのり（電話）「だって嬉しくって」

○みのりの部屋（夜）

ベッドに寝転がりながら話すみのり。

みのり「へへへ、やっぱりタカヤさんとお話しできるの嬉しい」

東雲（電話）「ああ：俺も嬉しいよ」

心なしか暗い東雲の声。

違和感に気付いたみのり、起き上がる。

みのり「タカヤさん：何か、あった？」

東雲（電話）「（間）どうして？」

みのり「だって、声：元気ない」

○東雲の自宅（夜）

東雲、苦笑しつつ手に持っていたコー
ヒーカップをテーブルに置く。

東雲「かなわねえなあ、みもりには」

みもり（電話）「電話くれたってことは：話
してくれるんでしょ？」

東雲「：そうだな」

○（回想）ライブハウスKAGUYA・全景

東雲がやってくる。

建物を眺めてまぶしそうに目を細める。
軽く発声練習をしてから、軽い足取り
で中に入っていく。

東雲（N）「退院してから俺は、早速スタジ
オに向かったんだ」

○同・バーカウンター

練習前の「エール」メンバーがマス
トと談笑している。

東雲 「よお」

全員が東雲の姿を見て一瞬硬直し、すぐに感嘆の声を上げる。

木村 「タカヤじゃん！」

高遠 「治ったのか」

スタッフ 「お久しぶりです、タカヤさん」

マスター 「元気そうだなあ」

東雲 「マスターは相変わらず元気みたいだな」

マスター 「生意気な口も復活かあ、良かった

なあ」

東雲 「おかげさまで」

秦 「おかえり、タカヤ」

東雲 「ただいま」

微笑みあう東雲と秦。

東雲 (N) 「皆歓迎してくれて、早速音合わせしようって話になった」

演奏を始める「エール」

楽器を奏でるメンバーの顔は皆明るい。

東雲がマイクを握り歌いだす。

東雲 「…!？」

東雲の声が出ない。

皆の顔が強張り、東雲を見る。

東雲も必死に声を出そうとするが全くでない。

東雲（N）「歌えなかったんだ：どんなに出そうとしても声が出なかった」

崩れ落ちるように膝をつく東雲。

秦と高遠が駆け寄る。

○みのりの部屋（夜）

ベッドの上に正座しているみのり。

唇をかむ。

東雲（電話）「笑っちゃまうだろ？せっかく喉が治ったと思ったのにコレだ」

みのり「原因はわかってるの？」

東雲（電話）「病院には行った。喉に異常はないって。ストレスとか：精神的なものじゃないかって」

みのり「そう：なんだ：」

東雲（電話）「今だって普通に話せるのに、

歌おうとしたらダメなんだ。まいったよ」

みのり「……………」

東雲（電話）「悪い、早めに連絡しようとは思ってたんだけどさ：ガツカリさせるかと思ってる」

みのり「全然気にしないでですよ、だって大変だったんだし！元気だってわかっただけでも私すごく嬉しいから」

東雲（電話）「サンキュな、みのり」

みのり、首を振る。

東雲（電話）「新曲な：お前に聴かせてやれないな」

みのり「そんなの、いつまでだって待ちます」

東雲（電話）「一生ないかもしれない」

みのり「（強い口調で）絶対あるもん」

○東雲の自宅

みのりの言葉が携帯から漏れる。

唇を噛む東雲。

東雲「随分自信あるんだな」

みのり（電話）「あるよ。だって、喉は異常なしなんですよ？だったら大丈夫だよ。きつと歌えるようになるよ」

東雲「確証はない」

みのり（電話）「絶対ダメっていう確証もないでしょ。諦めないでよ」

みのりの声が涙声になる。

みのり（電話）「やっと…前みたいにお話しできるようになってすごく嬉しかったの。だから…悲しいこと言わないでよう…」

東雲「みのり…」

東雲の手が目の前のみのりの頭を撫でるように伸びる。

東雲「悪かった。お前に弱音吐くなんて、俺がどうかしてた」

みのり（電話）「（鼻をすすりつつ）…ん」

東雲「なあ、今度会えないか」

みのり（電話）「スタジオですか？」

東雲「いや、お前に心配かけたお詫びに遊びに行こう」

○みのりの部屋

涙と鼻水を拭っていたみのり、抱えていたティッシュボックスを放り投げて正座しなおす。

みのり「それって！デートですか！」

東雲（電話）「ま、そういうことだな。俺も気分転換が欲しい」

みのり「ぜひ！ぜひ行きましょう！デート！やったああっ！」

元気になって飛び跳ねるみのり。

れいこ（階下から）「うるさいよみのり！」

みのり「あ、ごめんなさいーい」

おとなしくベッドに座るみのり。

携帯から東雲の笑う声が漏れている。

みのり「じゃあじゃあ、どこ行くか決めちゃいましょ！私ねえデートで行きたいところがあつて…」

楽しそうに会話を続けるみのりと東雲。
夜が更けていく。

○みのりの部屋（朝）

窓の外は明るい。

みのり「ねーお母さんどう？」

クローゼットの前、気合の入った服を着たみのりが一回転してみせる。

れいこ、少しうんざりしている。

みのり「このワンピース変じゃない？短すぎない？はしたくない？」

れいこ「全然大丈夫よ、年相応」

みのり「えー年相応？それって子供っぽいってこと？それじゃあもう少しお姉さんぽいカッコの方が」

れいこ「似合ってるから安心なさい」

みのり「そう？だってタカヤさんてカッコイイんだよ、子供っぽいカッコじゃ隣に並んだとき釣り合わないかも」

れいこ「無理に背伸びしたカッコしたって余計にカッコ悪くなるだけよ」

みのり「でもお」

れいこ「大丈夫、みのりは可愛いわよ。お母さんが保証する。タカヤさんも可愛いって言うってくれるわ」

みのり「そ：そう？」

想像したのか真っ赤になってにやけるみのり。

れいこ「だからいい加減に決めてちょうだい。

もう時間になっちゃうんじゃないの？」

みのり「え、今何時」

れいこ「9時30分」

みのり「やばっ」

家の外からクラクションの音。

みのり「きゃータカヤさん来ちゃった！」

れいこ「だから言ったのに！早く早く！」

慌てて白杖と鞆を取り部屋を出ていくみのり。れいこも後に続く。

○みのりの家・前

東雲の運転する黒のソリオが停車している。

れいこに支えられながら車に乗り込む
みのり。

東雲「それじゃあ、お預かりします」

れいこ「すみませんねえ、よろしくお願
いします。あまりわがまま言うようでしたら遠
慮なく叱ってやってくださいね」

みのり「お母さん！」

東雲「ははは、大丈夫ですよ。俺の方が叱ら
れるくらいなんで」

みのり「そうそう」

れいこ「まあ、そんな見え透いたお世辞は結
構ですのよ」

みのり「見え透いたって何よー！」

東雲「バレました？」

みのり「タカヤさんまで！」

一同に笑顔が広がる。

東雲「じゃあ、いってきます」

みのり「いってきます！」

れいこ「はい、いってらっしゃい」

ソリオが走り出す。その姿を穏やかな

笑顔で見送るれいこ。

○道路

ソリオが街中を走っていく。比較的ゆつくりとした速度。

○車内

運転する東雲と助手席でご機嫌に鼻歌を歌うみのり。

みのり「ちよつと意外だったなあ」

東雲「何が」

みのり「車。タカヤさんだから、スポーツカ

ーとか乗ってるんだと思ってた」

東雲「ああ、普段はGT~~カ~~乗ってるよ」

みのり「そうなの？」

東雲「でもああいうタイプだと乗り降りしに

くいだろ。車高低いし」

みのり「え、じゃあもしかして…」

東雲「借りてきた」

みのり「私のために…？」

顔がにやけるみのり。

運転中で顔が見れない東雲。

東雲「なんだ締めりのない声出しやがって…」

みのり「愛されてるなあって」

東雲「ははは」

みのり「エーなんですかその反応！」

○遊園地・全景

ソリオが入っていく。

○同・園内

各アトラクションから楽しそうな声が響いている。

家族連れやカップルでにぎわっている。

絶叫マシンを楽しむ東雲とみのり。

ゴーカート、コーヒーカップ、バイキ

ング：と目いっぱい楽しんでいる。

○同・オープンカフェ

席について一息ついているみのり。

東雲、両手にコーラの入ったカップを
持って戻ってくる。

東雲「ほら、コーラ」

東雲、コーラをみのりに手渡して座り
飲む。

みのり「ありがとう」

みのり、コーラを飲む。

みのり「あーおいしー」

満足そうに気を抜くみのり。

東雲「結構回ったな」

みのり「うん、こんなにたくさん回ったの何
年振りかな」

東雲「疲れたか」

みのり「全然！」

東雲「そうか」

みのり「まだ見えてた頃に行っただっきりだっ
たから、すごく楽しかった。ありがとう、
タカヤさん」

東雲「…いや、俺も気分転換になったから」

ストローをグリグリ回しているみのり。

東雲「なあ、きいてもいいか。その：みり
の、目のこと」

みり「いいですよー」

みり、コーラを一口。

みり「幼稚園くらいの頃だったかな、私病
気したんですよ。めっちゃ熱高く出て：」

○（回想）みりの家

幼いみりが高熱にうなされている。

若いれいこが隣で看病している。

部屋に救急隊員が入ってきてみりを

抱き上げ病院へと運んでいく。

みり（現代）「細かいことは全然覚えてな
いんですけど、その熱のせいで見えなくな
っちゃったみたい」

○遊園地・オープンカフェ

東雲、神妙な顔でみりの話を聞いて
いる。

みりはコーラを飲みつつ、世間話を

しているような雰囲気。

みのり「見えてた頃のこともちよっとしか覚えてないんですよねえ」

東雲「治療とか、そういうのはできないのか」

東雲、努めて平静を装いつつコーラを飲み干す。

みのり「それもよくわかんない。なんかお母さんが先生と話してるみたいだけど、詳しいことは何にも」

東雲「見えるように、なりたいよな…」

みのり「そりゃーなりたいですよ！タカヤさんの顔とかどんな感じなのかなって気になるもん。知ってます？今私の中で、タカヤさんめっちゃイケメンだから」

東雲「そりゃハードル高いな」

笑いあう二人。

東雲、飲み終えた二人分のコップを捨てに行く。

みのり「でも、そのための治療とか、どんなのがあるかわかんないけど絶対大変なので

しよ？それ考えたら怖いなあって思っちゃ
う。」

東雲「お前でも怖いことあるんだな」

みのり「えーなんですかそのその言い方！」

東雲「今日だってどのアトラクションも平気
そうだったからさ。心臓鉄でできてんじや
ないかって思ったぜ」

みのり「もー！弱い美少女に対して言うセ
リフじゃないですよそれ！」

東雲、笑う。

頬を膨らませているみのり。

みのり「笑いすぎ！」

東雲「（笑いをこらえつつ）悪い悪い。じや
あお嬢様、そろそろ次乗りに行くか？」

みのり「うむ！」

みのり、手のひらを下にして手を差し
出す。

東雲、その手を恭しく取る。

東雲「エスコートしましょう」

立ち上がり、歩き出す二人。

○ 同・全景（夕）

夕日に園内が照らされている。

○ 同・駐車場（夕）

二人を乗せたソリオが遊園地を出ていく。

○ 車内（夕）

助手席で眠るみのり。

東雲、運転しながらチラリと様子を見かがう。眠っているのを確認。

オーディオを操作して「エール」の楽曲を流し始める。

イントロが流れ、歌おうと口を開く東雲。

東雲 「……………」

声はやはり出ない。

東雲、ため息をつくとも音楽を切り替える。

東雲 「：俺も、怖いのか：」

○みのりの家・全景（夜）

ソリオが停まっている。

れいこが慌てて駆け寄ってくる。

れいこ 「まあまあ、すみません！（玄関に向
かって）お父さーん、手伝って！」

助手席で熟睡しているみのり。

れいこ 「本当にこの子ったら：。タカヤさん
ごめんなさい、今日一日大変だったでしょ
う？」

東雲 「いえ、俺は全然」

玄関から東実（♂）が出てくる。眠っ
てるみのりを見て驚いて近づく。

れいこ 「お父さん、みのり連れて入ってあげ
て」

東 「お、おう」

東、みのりを抱え上げて車から降ろす。

家に戻る前に東雲に一礼。

東雲も会釈を返す。

抱えられているみのり、幸せそうな寝顔。

れいこ、それを見送って苦笑。

れいこ「あの子、あんなに幸せそうな顔しちやって…」

れいこ、東雲に向き合って深く頭を下げる。

れいこ「今日は本当にありがとうございました」

東雲「そんな、俺の方こそみのりさんに付き合ってもらったような感じで…。おかげですごく楽しい時間を過ごせました」

れいこ「みのりのあの顔、きつと同じ気持ちですね」

東雲「そうだと嬉しいです」

れいこ「あの、こんなことご迷惑かもしれませんが：また時々、みのりと会ってやっていただけます？あの子、あなたの歌を聴くようになっから前よりももっと元気になったように」

東雲 「俺でよければ：ぜひ」

れいこ 「よかった。：あ、あまり引き止めては悪いわね。今日は本当にありがとうございます。ございました。またいらしてくださいね」

東雲 「はい、ありがとうございます。失礼します」

東雲、一礼するとソリオに乗り込み去っていく。

れいこ、その姿を見送る。

れいこ 「あんな人が乙女心がわかってる歌詞を書いているなんて：。人は見た目によらないわねえ」

れいこが入ってくると東が玄関で待っている。

東 「あの人、もう帰ったのか」

れいこ 「ええ、さつき」

東 「そうか：」

れいこ 「なに？心配になっちゃった？取られるんじゃないかって」

東 「ば、バカなこと言うな」

れいこ「私は歓迎ですよ、見た目よりもずっと紳士だったし」

東「まだ早い」

れいこ「そんなことないわ、わたしもみのりくらいの年にはね…」

言いながら部屋の奥へと進んでいくれいこ。

東「なんだって？そんな話聞いたこと無いぞ。

おい、れいこ！」

あわてて後を追う東。

○同・みのりの部屋（朝）

朝日が部屋を照らしている。

気持ちよく眠っているみのり。

携帯のアラームが鳴り、寝ぼけながら携帯を取り上げ、止めるみのり。

みのり「…あれ、ここ…ウチのベッド…？あ

れ、私昨日は確か…」

ノックの音がしてれいこが顔を出す。

れいこ「起きた？みのり」

みのり「お母さん？私いつ帰ってきたっけ」
れいこ「タカヤさんが昨日連れて帰ってきて
くれたのよ。あんた、グッスリ寝てて起き
ないんだから」

みのり「も、もしかしてタカヤさんにだっこ
されちゃったりなんか…？」

れいこ「残念、お父さんに運んでもらったわ」
みのり「なんだあゝ」

れいこ「ちゃんと昨日のこと、お礼言ってお
きなさいよ」

みのり「わかってるよ」

れいこ「朝ごはんできてるから、着替えたら
降りておいでね。今日は病院に行く日だか
ら」

みのり「はあい」

れいこ、部屋を出ていく。

着替える準備を始めるみのり。

○東雲の自宅

散らかった部屋の真ん中、ソファで眠

る東雲。

テーブルの上にはブランデーの空きボトルとグラス。

開きっぱなしのPCからは「エール」の、秦がボーカルを務めている新曲が流れている。

○某市立病院・診察室

（前シーンから曲を引き継いだまま）

新藤和美医師（ち）とみのり、れいこが向き合っている。

れいこの手には治療についての説明が書かれた書類の束。

新藤医師の話聞き、考え込むみのり。れいこが心配そうに彼女の肩を抱く。

みのり、ゆっくりと顔を上げて。

みのり「お願いします」

みのりの表情は強い意思を秘めている。

安堵の表情を浮かべるれいこ。

新藤医師は嬉しそうに微笑んでいる。

(音楽ここまで)

○ライブハウス KAGUYA・バー

秦が一人、バーカウンターに座っている。

スマホの画面には東雲への発信履歴がいくつも表示されている。

マスターが入ってくる。

マスター「タカヤ、連絡ついたか」

秦、無言で首を振る。

マスター「もう来ないつもりかなあ」

秦「あいつは、そんな奴じゃないですよ」

秦、スマホを取りLINEを打つ。

秦(LINE)「時間あるときに電話くれ」

送信。

ため息をつく秦。

秦「マスター、ウイスキーくれないか」

マスター「お前が飲むとは珍しいな」

LINEに既読がつく。

○東雲の自宅

寝起きの東雲が秦からのLINEを見ている。

そのまま画面を閉じてテーブルの上へ。

東雲「悪いな：今はまだ、冷静に話せないや」

○ライブハウスKAGUYA・バー

秦の両隣に木村と高遠が座り、それぞれ酒を飲んでいる。

木村「電話あったあ？」

秦「既読にはなったけど、まだ」

木村「やっぱり、相当ショックだったのかな、声が出なくなっただの」

秦「あいつああ見えて、歌に結構命かけてたからな。自己アピールっての？歌ってるときはずべてさらけ出せるっていうか」

木村「あーわかる。タカヤの歌声って、いつもよりずっと素直だもんね」

高遠「その声を失ったわけか」

木村「でもさあ、喉はもう治ってたよね？普

通に話せてたし。なのになんで歌えないんだろ」

高遠 「ストレス、とか」

木村 「えー歌えないことがストレスってならわかるけど、なんでストレスで歌えなくなっちゃうわけ？歌うのが好きだった人が」

マスター 「そこに原因があるんじゃないのか」

木村 「そこって？」

マスター 「歌うことが自己表現だったタカヤだからこそその、ストレスだよ」

考え込む三人。

秦 「…やっぱり、俺のせいかな…」

高遠 「リョウゴが代役？」

木村 「ボーカル取られたからってこと？でも

リョウゴはあくまで代役であって」

秦 「何度も「エール」のボーカルはお前しかいないってタカヤには言ったんだけど」

マスター 「そんなことはタカヤだってわかってるさ。でも、それでも割り切れない部分はあったんじゃないか」

黙り込む三人。

マスター「あいつはあれだけデカイ態度だけど結構打たれ弱いからな。不安になっちゃまったんだろな」

秦「：俺たちはどうしたら」

マスター「誰も悪くないんだ、あいつが自分で昇華するのを待つしかないんじゃないのか」

木村「タカヤ：」

マスター「幸い、あいつを支えてくれそうな人材はいるし。ほら、最近よく来てたあの盲目の子」

秦「ああ、みのりちゃん」

マスター「あの子は最初から感じてたみたいだったからな、タカヤの不安」

木村「そーいやタカヤが連れてきたんだったよね、あの子。助けってくれるといいなあ」

秦「俺たちは信じて待つしかない、か。なんか情けない気もするけど」

マスター「いやいや、お前らだからできるこ

とだろう。ずっと一緒に組んできてるんだからな、信じてやれ」

秦「：そうですね」

三人の表情が少し明るくなる。

秦、残っていたグラスの酒を煽って。

秦「よし、じゃあタカヤが戻ってきたときの

ためにとっておきの曲作って待ってようぜ」

高遠「いいな、それ」

木村「賛成！僕も協力するよ」

秦「ありがとうマスター！俺たち待つことに

するわ」

マスター「おう、頑張れよ」

元気よくバーカウンターを後にする三

人。

マスター、その背中を満足そうに眺めている。

○某市立病院・眼科医局

和美医師がイヤホンで音楽を聴きながら「角膜手術」に関する本を読んでいる

る。

若い看護師（25）が入ってくる。

看護師「お疲れ様でーす：あれ、新藤先生まだいたんですか？」

和美「ん？：あれ、夜勤組？え、もうそんな時間？」

看護師「また勉強に夢中になってたんですかー？ちゃんと家に帰らなきゃダメですよ」

和美「ヤバ、今日はさすがに帰らないと」

準備をする看護師の横で慌てて帰宅準備を始める和美。

先に用意を終えた看護師が机に放置されているアイポッドに気付き近づく。

看護師「あれ、珍しい音楽聴いてたんですか」

和美「ああ、それ。私が診てる子からオスメされたから聴いてたの」

看護師「いいですか？（聴いても）」

和美「どうぞ」

看護師、嬉しそうにイヤホンを入
れる。

和美「東さんて患者さんなんだけどもう
すっごいオススメされたわけよ。知ってる？
インディーズバンドらしいんだけど」

看護師「これ「エール」じゃん！」

和美「お、知ってるんだ？」

看護師は得意げに親指を立てて見せる。

看護師「趣味「ライブ巡り」をなめないでく
ださいよお。「エール」は今かなり注目さ
れてるバンドで、メジャーデビューも近い
んじゃないかって噂されてるくらいなん
です」

ノリノリで聴いている看護師。

和美「さすがだねえ。おばちゃんには何がな
にやら」

身支度を終えた和美、看護師からイヤ
ホンを取り上げる。

看護師はまだ聴きたそうな様子。

看護師「東さんわかってますねえ、一緒に語
りたいくらい」

和美「ぜひ相手してあげてよ、今度入院する

予定だから」

看護師「あら、じゃあぜひ」

和美「それじゃあ、お先」

看護師「おつかれさまです！」

和美が出ていく。

看護師も鼻歌を歌いながら仕事に向かう。

○同・廊下

和美、イヤホンを着けて聴きながら帰路に就く。

和美「CD買おうかな」

○東雲の自宅（夕方）

ソファに寝そべりただ空を見つめている東雲。

PCからの音楽は止まっている。

昨夜のブランデーボトルやグラスはそのまま。

携帯が鳴る。やや間があって手に取る。

発信者はみのり。

東雲 「…もしもし」

みのり（電話） 「もしもし、タカヤさん！こ
んばんは」

東雲 「ああ…」

みのり（電話） 「昨日はごめんなさい、ちや
んとお礼もしないままになっちゃって」

東雲 「いや、気にするな」

みのり（電話） 「良かった。ところで、今夕
カヤさんどこにいるの？」

東雲 「え？家だけ…」

東雲 が言い終わるや否やチャイムが鳴
る。

東雲 「あ、来客…」

みのり（電話） 「開けて開けて！」

東雲 「え？まさか…」

慌てて玄関へ向かう東雲。

○同・玄関

東雲 が通話中のまま扉を開ける。

同じく通話状態のみのがそこに立っている。傍らにはれいこの姿も。

みのり「来ちゃった」

東雲「え：なんで、俺の家：」

みのり「KAGUYAに行ったらリョウゴさんたちがいたから教えてもらっちゃった。

ほらほら早く中に入れて！不審に思われちゃうよ」

東雲「あ、ああ：」

れいこ「みのり、お母さんは買い物に行ってくるから、終わったら連絡ちょうだい。（

東雲に）タカヤさん、しばらくお願いしますね」

東雲「え、あ、はい：」

軽く会釈をして、れいこはニコニコと去っていく。

それを茫然と見送る東雲。

みのり「タカヤさん、早く入れて！」

東雲「あ、ああ」

言われるままみのりを家の中にいれる。

○同・東雲の部屋

みのりが入ってくる。

東雲、みのりを部屋の入り口で止まらせて、散らかり放題のソファやテーブルの上を片付け始める。

東雲「ちよ、ちよつとそこで止まってて。座るところ作る」

みのり「タカヤさん、お酒飲んでたでしょ、部屋の中臭いよ換気しよ」

東雲「わかってるよ」

みのり「それと『座るところ作る』ってこと

はぁ、結構散らかってるってことなのかな？

私が見えてなくて良かったねー」

東雲「悪かったな！男の一人暮らしなんざ大體散らかってんだよ」

片付け完了。

みのりの手を引いて、ソファへと案内する。

座らせるとキッチンへ向かい飲み物の

用意。

東雲 「何か飲むか： つつても、酒はダメだし
なあ」

みのり 「おかまいなくーそんなに長居しない
から」

とりあえずアイスコーヒーを入れてソ
ファに戻ってくる東雲。

みのり用のカフェオレを渡す。

みのりは一口飲む。

東雲 「それで？急に押し掛けるなんてどうい
うことだよ。何かあったのか」

みのり 「まああったというかなんというか」

東雲 「？」

不思議そうにみのりを見る東雲。

みのり、得意げな表情で東雲を見上げ
る。

みのり 「あのね。私、手術することにした」

東雲 「手術？」

みのり 「うん」

○（回想）某市立病院・診察室

和美から説明を聞いているみのりとれ
いこ。

みのり「見えるようになれるんですか」

和美「可能性は高いと思います。手術をして
リハビリを頑張れば、杖は取れるくらいに
はなれるかと」

みのりの肩をそっと抱くれいこ。

みのり、その手を抱き返して、一息つ
くと。

みのり「先生。お願いします」

○東雲の自宅

東雲「でも、なんで急に？怖いって…」

みのり「うん、怖いよ。怖いけど…。昨日言
ったでしょ？私タカヤさんの顔が見たいの。

歌ってる姿が」

東雲「みのり…」

みのり「だから、頑張ろうかなって。昨日話
してたら、なんか決意できちゃった」

満足げに微笑むみのり。

みのり「今日の報告は、それだけ！」

元気よく立ち上がり、携帯でれいこに連絡を始めるみのり。

東雲、みのりをまぶしそうに見上げる。

○同・窓際

窓越しに、迎えに来たれいこと共に車に乗り込むみのりの姿が見える。

それを黙って見ている東雲。

東雲（M）「みのりは、強い子だ。その時はっきりと思った。俺よりもずっと若い女の子なのに。俺よりもずっと強い」

東雲、目を閉じて息を吐く。

踵を返しキッチンへ向かう。

棚から新しいブランデーのボトルを取り出し、コップへ注ぐと一気に煽る。

東雲（M）「俺はまだ、こんなにも怯えているというのに」

○ライブハウスKAGUYA・スタジオ前（翌日）

東雲がやってくる。

中からは練習している音が微かに漏れている。

東雲、軽く咳払い。平静を装いつつ扉を開ける。

○同・スタジオ

扉が開き東雲が入ってくる。

それぞれ自主練習していた「エール」メンバー、その姿を見てあっと声が漏れる。

木村「タカヤ！久しぶり！」

木村が真っ先に東雲に駆け寄る。

東雲「おお…」

秦「タカヤ」

秦は心配そうに近づいてくる。高遠は

木村同様、安堵の表情。

東雲「…連絡、返してなくてすまん」

秦「いけるのか？」

東雲「……………」

目を逸らす東雲。

木村「そだそだ、この間みのりちゃん、タカヤのどこ行った？」

東雲「あ、ああ。急に来たからビックリしたぞ。お前ら勝手に教えんなよ」

木村「えーだって彼女がお前に会いたそうだったからさ。女の子の頼みはきいてやんないと。ねえ？リョウゴ」

木村に小突かれ、秦の表情が緩む。

秦「ああ、そうだな。可愛い女の子の為なら、タカヤの個人情報の一つや二つ」

東雲「お前らなあ」

全員の顔に笑顔が戻る。

東雲「…ありがとうな。あいつと話してて…逃げたらんねえなって思ったんだ」

東雲、しっかりと全員の顔を見つめる。

東雲「だから、ここに来た」

秦たち、うなづく。

秦 「俺たちは待ってるよ。タカヤの場所は
つと空けて待ってる」

東雲 「…ああ」

東雲の携帯が鳴る。着信相手はみのりの番号。

東雲 「もしもし。みのりか？」

電話の向こうの声に、東雲の顔が曇る。

東雲 「あ、お母さんですか。…はい…え!？」

東雲のただならぬ様子に全員が眉をひそめる。

何か会話した後、電話を切った東雲の

表情は青白い。

秦 「タカヤ…何かあったのか？」

秦を見る東雲の目は虚ろ。

東雲 「みのりが…」

○某市立病院・病室前

病室の名札にみのりの名前。

東雲 「（つながって）事故に遭ったって…」

○ 同・みのりの病室

頭に包帯を巻いて点滴をして眠っているみのり。横には泣きはらした目のれいこ。
ノックの音にれいこが顔を上げると、東雲と秦が息を切らしながら入ってくる。

○ 同・談話室

れいこと東雲、秦が話している。
れいこ「よそ見運転だったそうです…。幸い頭の傷は、出血の割にはそこまで酷くはないそうなんです…。」
秦「ですが：何か？」
れいこ、また泣き出す。

○ 同・みのりの病室

眠っているみのり。
東雲、ベッドサイドに座ってみのりを見つめている。

サイドの棚にはみよりの白杖が立てかけてある。事故のせいかなんでいる。れいこの声「麻酔からもう覚めてもいいはずなのに、起きないんです」

○同・談話室（回想）

泣くれいこの肩を優しく叩いてやる秦。茫然と立ち尽くしている東雲。

れいこ「私：このまま起きなかつたらどうしようかと思つて：それで、不安になつて：」

○同・みよりの病室

東雲、棚の上のみよりの携帯を見つける。

何気なく手に取ると、待ち受け画面が

「エール」のCDジャケット。

東雲、思わずみよりの顔を見る。

相変わらず眠っているみよりの。

東雲「：そんなに俺の顔、見たいのかよ」

みよりの顔をそつと撫でる。

東雲「見たいってんなら、いくらでも見せてやるのになあ」

みのりの声「私、タカヤさんの歌ってる姿が見たいの」

東雲、みのりの頬を撫でていた手を握り締める。

東雲「…俺の歌聴いたら、起きてくれるのか」

東雲、口を開き歌おうとするがやはり声が出ない。

喉を押さえ、苦しむ東雲。

東雲の頬を涙が伝う。

東雲「…歌いたい！」

みのりの手を握る東雲。

みのりは未だ眠ったまま。

東雲「歌いたい…なんで…なんで出ないんだちくしょう…!!」

東雲の慟哭が病室に響く。

○同・全景（数日後）

青空が広がっている。

○ 同 ・ 中庭

のどかな気候の中、入院患者や利用者が何人も散歩やひなたぼっこを楽しんでいる。

東雲が一人、ベンチに座っている。

ミントのど飴をなめながら携帯で時間を確認したり辺りを見回したりと落ち着かない。

れいこ「お待たせしました」

声が出た方を振り向くと、そこにはれいここと、入院着姿のみり。

思わず立ち上がる東雲。

みり「タカヤさん」

笑顔で手を振るみりの手には白杖は無い。

東雲、一瞬泣きそうな顔になり慌てて顔を繕って手を振り返す。

みり、走り出す。まっすぐタカヤに向かつて。

途中で何かに躓くみのり。

東雲「わっ」

東雲がとっさに駆け寄りみのりを抱き止める。

みのり「ありがとうございます」

東雲「見えるようになっても相変わらずだな」

ヘラっと笑うみのり。

東雲「何がおかしい？」

みのり「：ほら、やっぱりイケメンだった」

虚を突かれる東雲。一瞬の間を置いて吹き出す。

○同・中庭（時間経過）

二人でベンチに座っている。

みのり「それで？聴かせてくれた新曲はいつ披露するの？私夢の中でしか聴けてないから、早く生で聴きたいんだけどな」

東雲「それはお前の退院日次第だな」

みのり「よし、先生と相談して早く退院するようにする」

東雲 「あまり無理すんなよ。事故のケガだつて残ってるんだろ」

東雲、みのりの頭をポンポンと叩く。

嬉しそうなみのり。

みのり 「大丈夫です、そっちは」

東雲の携帯が鳴る。秦からのLINE。

画面を見て面倒そうな表情の東雲。

東雲 「リョウゴだ」

みのり 「練習？」

東雲 「いや：何かレコード会社の人 coming とかなんとか」

みのり 「えーすごいすごい！それってメジャ

ーデビューしちゃうとか？」

東雲 「いやまだどんな話か…」

みのり 「レコード会社っていったらデビューの話しかありませんって！大変大変早く行かないきゃ！ノンビリしてる暇ないですよー！」

みのり、東雲を強引に立たせて背中を押し出す。

よろける東雲。

東雲 「お、おい」

みのり 「退院日決まったら連絡するから待つててくださいね！」

みのり、ニッコリ笑ってタッチするよ
うに手のひらを差し出す。

東雲 「：ああ」

東雲、苦笑しつつタッチする。

○ライブハウス KAGUYA・ライブホール

(数日後)

満員の観客席。

何人かの手にあるウチワには「タカヤ
おかえり」と書いてある。

観客席最前列中央には、白杖を持って
いないみのりと小夜子の姿。

小夜子が一生懸命みのりにライブのマ
ナー等と説明し、みのりも熱心に聞い
ている。

開演を知らせるブザーが鳴り、会場が
暗くなる。

にわかには盛り上がる観客たち。

暗闇の中ステージ上に「エール」が現れスタンバイ。

木村のリズムに合わせて演奏が始まると同時に、一斉にステージをライトが照らす。

大歓声の観客。

センターに立っている東雲がゆっくりと口を開き、高らかに歌いだす。

その姿に、感極まったみのが泣き出している。

小夜子が優しく抱きしめている。

東雲もその姿を壇上から確認している。

東雲の声「（先行して）協力してくれ」

○（回想）同・スタジオ

東雲が「エール」メンバーに頭を下げている。

戸惑いを隠せない三人。

秦「頭を上げてくれ、タカヤ。協力は構わな

いが、お前は本当に歌えるのか」

東雲「…正直、わからない。でも、歌いた
んだ。あいつのために俺ができることと言
ったらきつと、歌うことだけだから」

木村「タカヤ…」

高遠「リョウゴ、やろう」

木村と高遠、互いに頷きあうと早速演
奏の準備を始める。

秦「…わかった」

秦もギターを持つ。東雲をマイクに立
ちよう促し、テーブルの上のICレコ
ーダーを起動する。

秦「あの新曲いくぞ」

東雲、緊張しながらもうなずく。
演奏が始まる。

○（回想）某市立病院・みのりの病室

みのりの枕元、ICレコーダーからは
先程録音した曲が流れている。

東雲の歌声が戻っている。

東雲、秦、れいこが静かにみのりの様
子を見つめている。

みのりの指が、ピクリと動く。

東雲「…あ…」

みのりの瞼が震え、ゆつくりと目が開
く。

三人から歓喜の声が漏れる。

れいこ「みのり…！」

れいこがみのりを抱きしめる。

秦「先生呼んでくる」

秦、東雲の肩をポンと叩くと足早に病
室を出ていく。

みのり「お、お母さん…？え、何苦しいよ…

え、なんで「エール」の曲流れてんの？え？

え？」

泣きながら抱きしめてくるれいこに困

惑するみのり。

そんな姿に、東雲は泣きそうになるの
を必死に堪えている。

東雲「…良かった…」

○ライブハウス K A G U Y A ・ライブホール
盛り上がるライブ会場。

演奏する「エール」メンバーは心から
の笑顔。

東雲も以前よりも優しい表情で歌って
いる。

小夜子と共に、飛び上がって楽しんで
いるみよりの姿。

東雲 「よおし、それじゃ新曲いくぜ！」

ひとときわ盛り上がる観客。

東雲 「…しっかり、目に焼き付けろよ」

東雲、みよりのを見つめて言う。

みよりのも精いっぱい笑顔でうなづく。

木村のステイックが鳴り、曲が始まる。

みよりに聴かせたあの曲が流れる中、
暗転。

E
N
D